

印刷教材と放送教材のあいだ

松 沢 弘 陽

〔1〕当初の意図

1 理想

印刷教材と放送とを通じる、授業の目的は何か？この点についての認識が、印刷教材と放送のそれぞれおよび両者の関係を根本から規定するであろう。筆者は、放送大学の場合にも、政治の世界における思想についての授業の目的は、唯一の「正解」や公理のようなものを示すことではなく、また事実についての情報を教えることには終わらないと考える。むしろ、政治の世界における思想には、「正解」や公理は存在しないことを明らかにし、問題の解決を求めて努力した先人たちの営みについて、正確で基礎的な情報を学習した上で、受講者自身が彼らに手引きされて、めいめいに解を求めて考えてゆく、考えることの大切さと面白さ、また考える方法を示したい。

そのように考えれば、①印刷教材の学習→②放送→③印刷教材の再学習という構造がのぞましいように思われる。①印刷教材は当然「教科書」とは内容を異にするものとなろう。印刷教材は、ある問題について「正解」を示すものではなく、また、事実についての情報を伝えるにとどまらない。ある問題についての、先人たちの異なる立場の思想を、原史料で示し、またそれらについての研究者の異なる解釈を研究文献の引用とで示すことが必要であろう。従って印刷教材には相応の分量が必要であり、また受講者がそれを予習しておくことが期待される。それを前提として②放送では、そのような情報を活用して受講者自ら問題を考えてゆく方法を手引きし、その面白さを味わえるようにする。③受講者は、そのような手引きによって、印刷教材を理解し活用し楽しむすべを示されて、もう一度印刷教材を学ぶ。

－2 現状認識

しかし、現在の印刷教材の分量では、－1にのべたような内容をもり込むことは、無理である。また、受講者の文字指向・教科書指向という文化的条件も容易には変わらないであろう。

－3 「日本政治思想」放送のねらい

－の2のような条件のもとで、－1のような理想に少しずつでも近づくにはどうしたらよいか、印刷教材にも工夫を試みた。しかし、ここには、現状においては、受講者が軽視しがちなラジオ放送に、どれだけ独自の役割を営ませることが出来るか、こころみたことがらを報告する。

〔2〕プラン

－0 印刷教材と放送教材との関連についての仮説

筆者は、思想史は、現在のわれわれと過去の思想家や民衆・時代との対話だと考えている。また講師と受講者の関係は、授業から学習指導や試験にいたるまで、対話だとも考えている。このように考えると、思想史の授業とは、講師と過去の思想家や民衆・時代との対話に受講者

をいぎない、過去の思想家・民衆・時代—受講者—講師という、言わば、三重の対話を成り立たせることになろう。この場合、放送は、印刷教材以上に、現代の講師と受講者に身近な材料を用いることが容易であるし、何よりも講師の肉声による語りかけは、受講者を三重の対話にいぎなう上で、印刷教材以上に力がある。筆者はこの「対話」を、「ラポール」を作り出すこととしてもとらえられないかと考えている。放送の場合この対話やラポールを成り立ちやすくする条件の1つは、先に記したように、放送の素材を受講者にとってより身近で親しみやすいものにすることが容易なことにある。筆者は、このような身近で親しみやすい素材を、「エンタテインメント」と呼べないかと考えて来た。「エンタテインメント」にも駄じゃれの類いのように、ひとの感覚をくすぐるにすぎないものもある。筆者の考える「エンタテインメント」は、しっかりした学問的研究や調査によって発見されるような面白さであり、聞き読む者に知的発見の喜びを味あわせ知的好奇心をかきたてるような面白さである（下記(2)－1a、－2b、cを参照）。筆者が印刷教材と放送との関係について考えたことから、河合隼雄氏が同氏のいわゆる「講義」と「お話」の関係についてのべられた考察と共通するように思われる。（参照、河合「講義とお話」『図書』1988年8月）。

以下、放送教材を、「音声でなければ伝えられないこと」と、「印刷教材でも音声でも伝えられるが、音声によって伝える方をえらんだこと」との2つに分けて、（－1と－2と）、考えて見たい。－1と－2のそれぞれのaからdまでの順は、おおむね筆者が放送のシナリオを考えるさい、とり上げた順序、あるいは、重視した程度の順序である。

－1 音声でなければ伝えられないこと（参照『日本政治思想』pp. 3－5）

a. 歌：歌詞、メロディー、伴奏の有無および楽器の種類、歌い手、歌われる場など。

b. テキストの朗読：「日本政治思想」でとりあげたことだけでも、テキストは文体の面でも多様である。福沢諭吉と中江兆民との文体は、明治期の美しく力強い散文の2つの典型といえよう。その福沢にも話しことばの文体をとった『福翁自伝』と『文明論之概略』のような議論の文もある。兆民にも一般の議論の文のほかに『三酔人経論問答』のような問答体あり、『民約訳解』のように、ルソーを、古典的な漢文に訳したものもある。テキストの思想や形の特質をよく理解した朗読によってそれぞれの思想家の、それぞれの文章の思想を理解することが、助けられるのであろう。また朗読してよくわかるよい文章は、必ずしもボキャブラリがやさしいから、わかりやすいのではなく、文章の主題が明確であり、主題が論理的に展開されており、展開の構造が明快であることに負うところが多いことが明らかになるだろう。（筆者の大学の講義で、放送大学の講義の中のテキストの朗読を聞かせたところ、ある学生は、福沢の『学問のすすめ』を第11編まで自分で朗読して見て、一見難しく見える明治初年の文章が、とてもよくわかるのに驚いた、とのべていた）。日本の近代化の中で、テキストを朗読し、ひとにも聞いてもらうという慣習は急速に失われてしまった。それともなお放送、演劇、教育などの世界ではテキストの朗読についての熱心なところみがなされすぐれた経験が蓄積されている。テキストの朗読には、なまじ受講者に顔を見せないラジオの方が、TVよりもよいという見方もある。このようなすぐれた経験とその成果を生かすことが出来れば、ラジオ放送の教材としての前途が大きく開けるのではなかろうか。

c. 文化受容のプロセスのテキスト朗読による表現：上記bを発展させたくわだてといえよ

う。ルソーの『社会契約論』から中江兆民の『民約訳解』への翻訳と註解のプロセスを、フランス語原文と兆民の古典的漢文、および両者の現代語訳のいわば四重朗読をこころみた（参照『日本政治思想』 pp. 74-77）。

d. 対談：「日本政治思想」15講の序論の放送を、現代国際社会における日本についての尖锐な問題提起でしられる、ジャーナリスト、K. ウォルフレン氏との対談から始めた。この対談は、印刷教材中の序論に、かなり詳しく紹介した、日本政治の歴史における思想の役割についての同氏の意見を敷衍する形で行った。そのねらいは2つ

①第一線のジャーナリストとの対談を通じて、1870年代から1930年代にいたる日本の政治思想が、現代に対してもっているアクチュアルな意味を浮かび上がらせる。

②外国人特派員との対談によって、日本の政治思想を国際的な文脈でとらえるいとぐちを示す、ことである。そして両方を通じて、受講者が政治の世界において、時代や国・文化のちがいをこえた普遍的原理の意味に目を向けられることが筆者の期待であった。

e. 上記a-dを当該回の印刷教材と関連づけながら、当該回の放送の全体の流れの中に織りこむことが必要になる。そのための筆者自身によるa-dに対する導入的な説明・分析などを行った。

-2 音声によっても伝えられること

印刷教材にもりこむことも、放送に入れることもどちらも出来る、しかし、「日本政治思想」では放送に入れたことがらがある。それは、直接には、印刷教材の分量がきわめて限られているという事情によるが、かりに印刷教材に十分な分量があるとしても、筆者としては、放送にまわすことを選ぶだろう。その理由については、本項eにふれる。a-dは筆者が、大すじにおいて、放送各回のシナリオを作るさいにとり上げた優先順位を示している。

a(1)：印刷教材当該回の主題と議論の展開の構造を説明する。

(2)：講義全体の展開の中での当該回の位置、他の回と当該回との関連について説明する。

印刷教材の中に引用あるいは紹介され、放送の中で朗読されるテキストについても、印刷教材の記述および放送自体についても、テキストとしての構造に注意し、テキストの読解（一聴解も？）を、テキストの構造に即して行うように、受講者にうながしたい。この点については〔2〕-1-bでもふれた。筆者は、現代日本人のテキスト読解において、この面の訓練がとくに重要だと考えている。またこのような手引きをすることによって、印刷教材の限られた分量の中に簡約した形でよりこんだメッセージを十分に引き出し、窮屈さから少しでも解放されて、エンジョイすることができれば、というのが筆者の願いである。

b. 印刷教材の中の漫画・肖像などのテキストとしての読み解き：限られた紙面をさいてもりこんだ漫画や写真を「さしみのつま」的存在に終わらせず、フルに活用したい。漫画や写真と当該回の主題との関連づけはいうまでもなく、他の回の漫画や写真とあるいは、放送の中の歌の分析とも結びつける（「日本政治思想」の中でそれが出来た唯一のケースは、第4回、p. 50と、pp. 62-63である）ことによって、1つの漫画や肖像写真から、意外なほど豊かなメッセージが引き出され、受講者の知的な楽しみをますことができるだろう。

c：当該回の時代や人物と講師とのパーソナルなか、わり：〔2〕-0でのべた現代に生きる講師と過去の思想家・民衆との間に、「ラポール」を作るための1つのこころみである。たとえば、

講義第8回の主人公陸羯南の「独立新聞記者」としての生活と意見および彼の論説を、陸羯南の新聞『日本』とのかかわりが深い、1989年の『朝日新聞』の論説主幹・論説委員の生活と意見およびその社説と比較してみた。また、近代日本の青春ともいえる大正デモクラシーの時代は、筆者の父母やおじおばたちの青春期でもある。大正デモクラシーの1つの画期となった吉野作造の出来事について、筆者は聴衆の中の1人だった父から実見談を聞かされていた。そのような個人的な回想から、第12回以降の大正デモクラシーを身近なものにしようところろみた。

d：政治理論の問題についての説明：印刷教材の序論に記したように、「日本政治思想」は、日本国憲法が前提する自由民主政を支える、政治原理についての理論的な、いわば共時的な問いを、すぐれた個人とその時代についての歴史的な、通時的な記述を通じて、さぐるという構成をとっている。したがって印刷教材各回にこのような政治思想についての理論的な問いがいくつもありこまれている。放送では、これらの理論的な問いを、各回に1つか2つとりあげて、印刷教材を敷衍しようと考えた。また放送の中でとりあげられる理論的な問題が、14回の本論の放送全体を通じて、主要な問題を網羅し、かつ相互に関連づけられて配置されているように心がけた。

e. 上記(a-d)を考える視点：これは、-2の冒頭に記したように、印刷教材の分量が十分であれば印刷教材にもりこむことが可能であり、教育上その方が効果的であろう。欧米の放送教育用教材には、この方向でよく工夫されたものが多い。放送大学でも、このようなかたちの、すぐれた先駆的な印刷教材が作られており、筆者もそれに多くを学んだ。それにもかゝらず、筆者がそのようなゆき方をすることにいさゝかためらいを感じるのは、次のような理由による。つまり日本の知的風土のもとでは、印刷教材が、上記のような意味でゆき届いたものであればあるほど、受講者は印刷教材にひっぱられ、教科書と参考書を習得することが学問だという伝統的な観念の拘束から抜け出しにくくなり、はせぬかという一抹の危惧である。〔1〕-1で記したように、筆者は、印刷教材を、教科書や参考書や学習手引き書とはちがった。考えるための素材ではよいのではないかと考えており、放送ではそれを材料にして、受講者がめいめいに、自分で考え、自由奔放に想像力を働かせ、楽しむようにできればと願っている。そのような意味であまり多くをもらいこんだ「よくできた」「ゆきとどいた」「親切的な」印刷教材になることに、根拠はかなり薄弱なのだが、やゝ躊躇するのである。

〔3〕教材の作製をおえて

-1 支援協力体制

筆者は、テレビやラジオと縁が遠い、放送教育についての予備知識が全くない素人である。それにもかゝらず〔1〕〔2〕のような意図でプランを立てたのは、身のほど知らずの冒険であり、『日本政治思想』の「まえがき」にのべた方々の協力的な助けがなければ、途中で立往生して、期限に教材を完成することも危なかったと思われる。多くの協力の中で最も有益だったチーム2つをここに紹介する。第一は、放送教育開発センターの多田教授を中心とするグループである。このグループからは〔2〕のプランの面でもそれを具体化する面でも強力な支援をいただいた。たとえば放送第1回の対談、第5回・第11回朗読などは特に研究会でのこのグループのメンバー

からの提言によるところが大きい。また、多田教授が終始変わらず筆者を励まし続け、頻繁に細かな実務にまでわたって筆者を助けられたことは、筆者にとって大きな支えだった。

筆者の大学においても、放送大学の援助によって、日本政治思想史専攻の若手研究者4人とともに研究会を行い、印刷教材放送の内容について示唆を与えられた。このような協力支援体制は、よい印刷教材と放送教材を作るために、きわめて有効と思われるので、儀礼という意味ではなく、実地的な方法の問題として、最初に特筆しておきたい。

このような協力があったにもかかわらず、筆者の非力のため、放送の準備に限っても、さまざまな問題を残した。

－2 放送の「シナリオ」の準備の出おくれ

印刷教材を作りながら放送の内容を構想し、印刷教材のページや行までが確定するのを待ち、それにあわせて放送の各回と全体のシナリオを完成するという手順にしたがった。したがって、印刷教材の準備にてまどった分だけ放送の準備の時間が少なくなり、放送シナリオは、各回ごとをまとめるのに精一杯で、15回全体を通じる構想にはほとんど配慮することが出来なかった。

－3 歌について：時間が不足したため、調査を途中で断念せざるをえず、音楽史家や現地の古老による解説と筆者との事前の打合せや調整もできなかった。

－4 テキスト朗読についての研究不足とチームワークの欠如

〔2〕－1－bに記したように日本においても、演劇・放送・教育の世界においては、さまざまな形の朗読、群読、「レーゼドラマ」などのすぐれたところみが重ねられている。しかし、今回の放送のために朗読を準備していただく過程で、ようやく、このような貴重な成果の一端をかい間見たというのが筆者の実情である。また離れた土地にいるとい事情もあって、テキスト朗読の「稽古」に参加し、テキストの解釈や朗読を協力して行う体制をとれなかった。

－5 学習指導・単位認定試験・「アンケート」にあらわれた受講者の反応と評価：学習指導、単位認定試験とも、印刷教材を読むだけでなく、放送を聞いているか、どの程度注意して聞いているかに目やすをつけることを念頭において出題した。「アンケート」は多田教授が行われたものである。(29～31頁を参照)。それからうかがわれる受講者の反応は、①筆者がおそれていた難解だという不満は、思ったよりも少なかった。②学習意欲は予想したよりも高い。しかし③やはり印刷教材は正解を示す教科書だという考えが強いように思われ、印刷教材から書き抜いて編綴したようなレポートや答案が多く(学習指導レポートを出した44人のなかには、筆者の言いたいことを筆者よりよく表現しているような、レポートをかいている受講者も1人か2人おり、驚いたが)、④放送は、かなり楽しんで聞かれたようだが、どこまで印刷教材と一体不可欠なものとして受け止められ理解されたかは、はっきりしない。

〔4〕今後の検討課題

－1 印刷教材の準備

放送が印刷教材の反復ではなく、印刷教材から独立したまとまりをもち、しかも、印刷教材の学習の手引きなど、印刷教材を前提にし、それに即したものであるとするならば、放送開始までに、印刷教材が完成し、ページや挿絵、図などの位置も確定していることが、必要であら

う。

－2 放送時間の制約

1回45分15回の講義は、「通学制」大学の講義1単位分しかない。これだけの時間でたとえ近代に限るにせよ、完結した通史の講義をすることは、ふつうの能力の教師にはほとんど不可能であろう。それをあえてすることは、1つの結論と、限られた情報だけを伝え、受講者はそれを「正解」として受け入れるという結果にみちびくであろう。現代の日本の教育に必要なのはゆとりと、それによって可能になる、めいめいに考えることの楽しさを味わうことであろう。そうだとすれば、45分×15回の概説によるカリキュラムの編成には考えなおす必要があるのではなかろうか(印刷教材についても同様の問題があるといえよう)。これに関連して、各科目相互の調整や、多くの科目にわたる体系性・系統性の検討も必要ではなかろうか。たとえば放送大学の講義には「日本近代史」といった科目がない。もしそれがあり、それを受講することを前提にして「日本政治思想」の授業を行うことが出来れば、受講者の理解はずい分らくになるだろう。

－3 4年のサイクルの中途での放送の手なおし

〔2〕－0でのべたような、過去の思想家・民衆・時代・との「対話」の1つの形として、筆者は大学の講義では、その回の主題と関連する、その時々政治的出来事を取りあげ、それを、講義で紹介した思想によって論評することになっている。これは学生に概して好評であり政治学の教育上意味が大きいと思われる。放送大学の講義でもころもみるにあたいすると思われるが、そのためには、とりあげる出来事をつねにアップ・トゥ・デイトにすることが望ましく、1サイクル4年の中間で、放送を部分的に手なおしすることが必要になろう。

－4 受講生による印刷教材・放送の評価

これを制度化して、講師にフィードバックすることを筆者は望みたい。

－5 印刷教材・放送とスクーリングの関連：筆者が作った印刷教材や放送については、スクーリングは行われるのであろうか。もし行われるようであれば受講生や担当教員のコメントをうかがいたい。

〈附記〉

「日本政治思想」の印刷教材と放送のうち歌と朗読の部分とを、1989年度の、筆者の勤務校である北海道大学法学部の日本政治思想史講義、筆者が出講した北海道教育大学札幌分校の特殊講義(政治学)で使って見た。また1990年春には、コーネル大学大学院のSeminar on Modern Japanese Thoughtでも教材として用いた。コーネル大学では、印刷教材のうちのマンガおよび放送の中の民衆歌の説明として、明治期を通じる社会・文化変動の中での、戯画―諷刺画および演歌―労働歌について、各1回簡単な講義をした。

また1991年9月―92年1月には、日本学研究センター(北京)で、日本研究志望の大学院学生のための授業に、印刷教材と放送の一部とを使ってみるつもりである。放送大学の放送授業と印刷教材とは、十分に準備してよいものを作れば、日本留学を予定している学部上級ないし大学院初年次でいどの外国人学生のための教材としても役立つのではないか、というのがこれまでにえた印象である。また外国人日本研究者からも、日本における視聴覚教材の質の高さを

評価した上で、それらについての包括的なライブラリーカタログを整備し、外国人学者の研究や教育に活用できるようにすることを強く求められた。